祝詞雜稿

全

特35
788

255
250

014535-001-3

特35-788

祝詞雜稿

安部　喜三郎／編

1冊（44丁）

M42

ABB-0920

特35
788

はしがき

この冊子は已に金光教第一教區支部々長を兼ねたりし明治三十八年の夏我本部に於て教會長講習會の開かれし時部内教會長等の言ひけらく年來部長が用ゐられし種々なる多くの祝詞あるなら む吾等の爲にそれを輯めて一の冊子となし分ち與へよと請ひて止まざるに依り其の後あれこれの原稿を調べつゝありしも常に事繁くして得果さゞりしが或は書翰に或は面りにそが脱稿を促さるゝこと屢なれば未だ調べ終へたりと云ふにはあらねど今はと思ひ起ちて神事の祭典に關はる部分のみを綴り祝詞雜稿と名け謄寫に換へて仮に印刷せしめたり然れば鹵莽なるふしも多から

内務
42 6 15
内交

んと思へど畢竟初學者の參考までにと物したるなれば見む人幸に此を諒せられよ

明治四十二年五月十日

編者しるす

目次

文例の部

祓詞　一丁
大祭祝詞　一丁
教祖大祭祝詞　二丁
春秋祈念祭祝詞　四丁
大祓祈念祭祝詞　五丁
同祓詞　六丁
金光四神貫行之君例祭祝詞　六丁
月次祭祝詞　七丁
金光管長誕生日祝祭祝詞　八丁
教會所開會式祝詞　九丁
教會新築地鎮祭祝詞　十丁
教會新築遷座奏上祝詞　十一丁
同　遷座式祝詞　十二丁
同　移轉祝祭祝詞　十二丁
元旦祭祝詞　十三丁
誕生式祝詞　十五丁
結婚式祝詞　十六丁
年賀祭祝詞　十七丁

家宅改築起工式祝詞　十八丁
上棟式祭祝詞　十九丁
開教奏上祝詞　二十丁
實例の部
小倉教會所教祖十年祭祝詞　二十一丁
金光四神貫行之君例祭祝詞　二十三丁
木盃下賜奉告祭祝詞　二十四丁
大祭祝詞　二十六丁
別派獨立祝祭祝詞　二十八丁
教祖廿五年紀念大祭祝詞　二十九丁
金光副管長誕生日祝祭祝詞　三十一丁
才崎教會所大祭祝詞　三十二丁
金光登勢一子大明媛廿五年祭
金光四神貫行之君例祭祝詞　三十四丁
澤田教師結婚式祝詞　三十五丁
國威宣揚祈願祭祝詞　三十六丁
祝捷祭祝詞　三十八丁
日本海大海戰祝捷祭祝詞　四十丁
平和克復祝祭祝詞　四十二丁
目次終

祝詞雜稿

文例の部

祓詞

掛巻も畏き祓戸大神等の御前遙に畏み畏みも白さく今日の御祭仕へ奉る教師を始めて參來集へる信徒等諸々過犯しけむ罪事の有らむをば天津菅苧の清々しく祓ひ給ひ清め給へと畏み畏みも白す

大祭祝詞

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教「何」教會長「職名 姓名」謹み敬ひ畏み畏みも白さく今更に言擧げ奉らむは最畏かれど天地に滿渡らせ給ふ大神の恩賴を畏み仰ぎ奉ると不肖「某」が大廣前に仕へ奉る隨廣く厚き御蔭蒙、ふる信徒の多くなりつゝ教會所の彌榮にゆくは尊くも又忝き極みなりけり故れ其の大御惠の千々の一つをだに報い奉らむとして今日はも年毎の例の大祭仕奉る禮自の幣物は由貴の御酒餅飯の鏡を始めて海川山野の味物を取々に取揃へ机代に置足はして擎げ奉らくを平らけく安らけく聞こし食し諾ひ給ひて今ゆ後「某」が日に異に教へ導く事等は說き過つ事なく傳へ違ふ事なく彌益に御教を擴め布施さしめ給ひて國内平穩に民草安泰に信徒

諸々信心の道を迷はず失はず末の末まで教へ
傳へて子孫の彌遠長く嚴し彌木榮の如立榮に
しめ給へと鵜自物頸根突拔きて畏み畏みも白
す

教祖大祭祝詞

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の
珍の廣前に金光教「何」教會長「職名 姓名」謹み敬ひ
畏み畏みも白さく言巻も畏き吾教祖大神と仰

ぎ奉り人力威乃命と稱へ奉る神の命はや信神く
の一念を凝らし給ひて今も昔も世界の人の得
悟らざりし天地の美し大道を開き大神の神德
を顯はし給ひ其神慮を心として八十二箇條の
神訓を立て何事も眞心の只一筋に賴めみかげ
は和賀心にありと教へ導き說き諭して世の人
等を救ひ給ひ助け給ひひきかくて大御教は次々
に擴まり益に布き渡りつゝ恩賴の彌增の參來

拜む信徒諸に廣く厚き神幸蒙らしめ給へば其を忝み奉り嬉み奉りて禮び奉るべき言の葉もなきまでなるぞ最も最も畏かりける故れ今日はも年毎の例の大祭仕へ奉りて献る物は由貴の御酒餅飯の鏡を始めて海川山野の味物を種々に撰整へ御前に置足はして捧げ奉らくを樂人ぞ奏づる琴の調べ豊に吹く笛の音の懇に聞こし食し諸ひ給ひて今も行先も「某」ぞ教導く

事等は大神の神慮に違ふ事なく教祖の神訓を過つ事なく彌廣に彌遠に布擴めしめ給ひて皇朝廷の御恩の千々の一つをだに報い奉らしめ給ひ信徒諸は信心して壯健で家業を務めよ君の爲なり國の爲なりとの神訓其儘に彌々益々勤め勵みて各も各もぞ子孫の彌次々に嚴し彌木榮の如立榮にしめ給へと鵜自物頸根突拔きて畏み畏みも白す

春秋祈念祭祝詞（春秋皇靈祭當日神前にて奏上する詞なり）

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教「何」教會長「職名姓名」畏み畏みも白さく今日はしも皇美麻命の歴代の神靈を齋ひ奉らせ給ふ春(秋)の最中の吉日の足日にしあれば大御前を忌まはり清まはり日に異に蒙れる恩頼を報い奉り將往先の神幸をも仰ぎ乞祈奉らむと御酒御饌種々の味物を捧げ奉り御祭仕へ奉らくを平らけく安らけく聞こし食し給ひて掛巻も畏き

天皇の大御代を嚴の御代の足の御代と成幸へ皇大御國の大稜威を彌益に天の壁立つ極み國の避立つ限り輝き渡り伊照り徹らしめ給ひ又信徒諸〻美し大道を踏み過つ事なく赤心の眞心以て朝夕に勤め結りて子孫の末遠長く彌茂盛に立榮えしめ給へと畏み畏みも白す

六月(十二月)大祓祈念祭祝詞

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に畏み畏みも白さく毎年に仕へ奉りし古事の例の隨今年六月(十二月)の今日の晦日の夕日の降の大祓に此れの教會所に仕へ奉る教師を始めて信徒諸を祓所に集へ祓物を置座に置きて祓ひ清むる事の狀を聞こし食し諸ひ給ひて天津菅苧の清々しく幣の夕風佐々屋々に今日より始めて罪と云ふ罪は殘る事なく清まらしめ給ひ祓ひ却らしめ給ひて各も各も家にも身にも病しく煩しき事なく家の產業を彌進めに進ましめ夜の守晝の守に守り給ひ幸へ給へと種々の机代物を御前に置足はして乞祈奉る事の由を彌高に聞こし食せと白す

同祓詞

集侍れる教師信徒等諸聞こし食せと宣る此れ

の教會所に仕へ奉る教師を始めて信徒男女等諸の過犯しけむ雑々の罪を今年六月(十二月)晦日の大祓に祓ひ給ひ清め給ふ事を諸聞こし食せ

金光四神貫行之君例祭祝詞

金光教教監金光四神貫行之君と稱へて齋ひ奉り座せ奉る神の命の御前に金光教「何」教會長「職名姓名」畏み畏みも白さく言擧せむは畏かれど汝命は教祖の大神の御後を神繼ぎ給ひ其神慮を心として飛彈工打墨繩の一筋に御志を堅め給ひ神訓を說き諭し眞道を教へ導き夜も安らに眠り給はで勤み給ひし御心行を慕ひ奉り功績を稱へ奉り今日はも毎年の例祭仕へ奉らむとして奉る禮自の物は御酒御饌より始めて海川山野の味物を種々に取揃へ机代に置足はして捧げ奉らくを平らけく安らけく聞こし食し

諸ひ給ひて今も往先も不肖「某」が日に異に教導
く事等をあなゝひ輔け彌益眞道を擴め布施さ
しめ給ひ信徒諸が家にも身にも柱神の柱事あ
らしめず夜の守日の守に守り給ひ幸へ給へと
畏み畏みも白す

月次祭祝詞

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の
珍の廣前に金光教「何」教會長「職名 姓名」畏み畏み
も白さく言擧奉らむは畏かれど我大神等の大
御惠輝り渡り恩頼の彌增に信徒諸が家をも身
をも神幸へ給ふ事を忝み奉り嬉しみ奉る隨今
日はも月次の御祭仕へ奉りて大御惠の百千々
の一つをだに報い奉らむと御酒御饌種々の味
物を御前に置足はして供奉らくを平らけく安
らけく聞こし食し諸ひ給ひて不肖「某」が日に異
に仕へ奉る教務に過あらしめず漸に御教を擴

め布施さしめ給ひて信徒諸が信心は家内に不和のなきが元なり信心は本心の玉を研くものぞやとの御教に違ふ事なく眞心の只一筋に高き神德を仰かしむべく夜の守晝の守に守り給ひ幸へ給へと畏み畏みも白す

金光管長誕生日祝祭祝詞

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教「何」教會長「職名 姓 名」畏み畏みも白さく今日の生日の足日は本教の大本部に座して教政を総掌り給ふ吾管長大陣の君の生坐し〻日にぞある故れ是れの大御前を忌しり嚴しり由貴の御酒餅飯の鏡を始めて海川山野の味物を撰整へ机代に置足はして祝祭仕へ奉らくを平らけく安らけく聞こし食し諾ひ給ひて吾大道の榮は天下に伊照り渡れる日本國の稜威と諸共に教の光を打輝し布擴めしめ給ひ

て四方の國に至るまで大神の恩頼を仰ぎ奉るべく成幸へ給へと鵜自物頸根突拔きて畏み畏みも白す

教會所開會式祝詞

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教「何」教會長「職名姓名」畏み畏みも白さく言巻も畏き吾教祖の大神の始め給ひ開き給ひし眞道を手取り大御教を畏み仰ぎ奉りて廣く厚き恩頼を蒙らむと此れの「何々」の里に住める信徒等が入紐の同心に相談らひ相議りて今回此れの教會所を取設け今日を吉日の美日と齋ひ定めて其の祝式執行はむとして神壽に壽豐祝に祝つゝ神事仕へ奉る禮自の幣帛は由貴の御酒餅飯の鏡を始めて海川山野の物等は忌机の上も多和々に置足はし奉り置きて吹鳴す笛の音に打合す皷の音の高々に聞こし

食し諸ひ給ひて今ゆ後「茉」ず日に異に教へ導く事等は神慮に違ふ事なく神訓の筋を過つ事なく美教の正道を彌遠彌廣に布擴めしめ給ひ信徒諸ず御前に參來て願と願ふ事等を各も各も眞心の隨神幸へ守り給へと鶉なす伊這び回り鵜自物頸根突拔きて畏み畏みも白す

教會新築地鎭祭祝詞

此れの地を祓ひ淸めて神籬立繁し招ぎ奉り座せ奉る天地金乃神教祖金光大神の御前に齋主「職名姓名」畏み畏みも白さく言卷も畏かれど我大神の神德輝り渡り彌益大道の開け進み行く隨教會所を築建てむと石切取り土搔き平均し其ず敷地と齋ひ定めて御祭仕へ奉る禮自の物と由貴の御饌御酒は瓮の上高知り瓮の腹滿て並べて海川山野の味物を種々に取揃へ御前に置足はし乞祈白す事の狀を熟らに聞こし食し

給ひて此の踏み平らす土の平らけく築堅むる
磐根の動く事なく建て上ぐる棟門高く厳しく
立榮えしめ堅磐に常磐に守り給ひ幸へ給へと
鵜自物頸根突拔きて畏み畏みも白す

教會所新築遷座奏上祝詞(仮殿)

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の
珍の廣前に「某」畏み畏みも白さく今回新に仕へ
奉りし瑞の神殿に今より遷し奉らむと仕へ奉
る狀を聞こし食して平らけく安らけく遷り給
へと畏み畏みも白す

同　遷座式祝詞(新殿)

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の
珍の廣前に金光教「何」教會長「職名　姓名」畏み畏み
も白さく是の教舍を新らしく築き仕へ奉りて
今其の工事竟へぬれば神殿の内外を忌はり
清まはり坐せ奉りて齋ひ奉りて幣帛と奉る御酒

御饌種々の味物を平らけく聞こし食し諸ひ給ひて不意く過犯しけん事等のあらむをば神直毘大直毘に神許し許し給ひて取葺ける甍は氷雨降り吹き立つ嵐にも騒ぎ損ふ事なく堅磐に常磐に守り給ひ幸へ給へと畏み畏みも白す

同　移轉祝祭祝詞

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教「何」教會長「職名　姓名」謹み敬ひ畏み畏みも白さく久方の天より高く荒金乃地より厚き我大神の大御惠はしも山の退き海の邊に至るまで輝り渡り大御教はしも日に開け月に榮え行く隨今回此れの教舍を改築き仕へ奉りて其の工事竟へぬれば今日の生日の足日に其の祝祭仕へ奉る禮自の幣帛は由貴の御酒餅飯の鏡を始め種々の味物を御前に置足はして捧げ奉らくを平らけく安らけく聞こし食し

諸ひ給ひて今日よりは大神の御名の四方八隅に轟きて恩頼の彌增に道の眞の彌廣に教の墨縄たゆたふ事なく押擴め布施さしめ給ひて不肖「某」ぞ教務を過つ事なく信徒諸ぞ家にも身にも枉神の枉事あらしめず夜の守日の守に守り給ひ幸へ給へと鹿自物膝折伏せ鵜自物頸根突拔きて畏み畏みも白す

元旦祭祝詞

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教「何」教會長「職名 姓名」畏み畏みも白さく新玉の年の始の神事仕へ奉らむとして大御酒大御饌を始めて山野の物は甘菜辛菜青海原の物は鰭の廣物鰭の狹物奥津藻菜邊津藻菜時の木の實と柑子柿栗に至る迄横山なす彌盛に盛捧げ奉りて言祝ぎ奉らくを平らけく安らけく聞こし食し給ひて豐榮登る日の御子

と外國人も仰ぎ奉れる我
天皇の大御代を嚴の御代の足の御代と成幸へ
給ひ皇御國の大稜威は富士の高嶺の彌高に八
洲の海の彌廣に伊照り渡らしめ給ひて此れの
教會所に所屬たる教師等や教務を過つ事なく
道の眞に違ふことなく八十の島曲に至る迄大
御教を彌益布擴めしめ給ひ信徒諸や家にも身
にも柱神の柱事なく產業の道は彌進みに進み

て家門も嚴し彌木榮の如茂盛に立榮えしめ給
ひて千代又千代と呼ぶ庭雀なす群集ひ鵜自物
頸根突拔きて畏み畏みも白す

誕生式祝詞

是の神床に鎭ひ奉り座せ奉る天地金乃神教祖
金光大神の珍の廣前に「職名（姓名）畏み畏みも白
さく此れの「姓名」の眞名子（或ハ長女二女三女）大神の御魂の殖
に因りて生出で恙もなく安らに生ひ立ちつゝ

ある事よ阿奈尊きかも阿奈忝きかも故れ今日
はも大御前を忌清まはりて禮代の御酒御饌を
捧け奉り謝恩の御祭仕へ奉る狀を聞こし食し
諾ひ給ひて今ゆ後須久々々と成長其の身は強
く健に其の心は實意に丁寧に正しき丈夫(多和也加なる手弱女)と成らしめ給ひ家門の榮えは眞榮木の常磐
に堅磐に守り惠み幸へ給へと畏み畏みも乞祈
奉らくと白す

結婚式祝詞

是の神床に鎭ひ奉り座せ奉る天地金乃神教祖
金光大神の珍の廣前に「職名(姓名)」畏み畏みも白
さく今日の活日に是の「姓名」の長男(或は二男三男)「某」「姓名」
の長女(或は二女三女)「何子」を迎へて妹脊の契なさまく欲
りして請の隨己れ「某」齋主として細鉾の中取持
ち其の儀式仕へ奉らむとして由貴の御酒餅飯
の鏡を始め種々の味物を大前に置足はして捧、

げ奉らくを平らけく安らけく聞こし食し給ひて夫妻の契は堅磐常磐に動く事なく移らふ事なく信心は家内に不和のなきが元なりとの神訓を心に銘り赤心の眞心以て笑歡に睦び合つ將來成務むる家の産業は世代の祖等の御心其儘に高砂の松の相生に千代万代かけて諸共に産出む愛子の殖り行き奉る榊の瑞枝瑞々と繁立榮えしめ給ひて氏門も廣く親の名も高く

擧げしめ給へと乞祈奉りつゝ夫妻諸共に打上る八平手の音高々に聞こし食せと畏み畏みも白す

年賀祭祝詞

是の神床に齋ひ奉り座せ奉る掛巻も畏き天地金乃神教祖金光大神の珍の御前に「職名姓名」畏み畏みも白さく阿奈尊きかも阿奈畏きかも吾大神の廣く厚き神幸を與へ給ふ隨是れの「姓名」

が呉竹の世に生出來しより璞玉の年まねく吾大道を手取りつゝ「四十二年」或は六十一年、八十八年」をなむ經にける故れ空蟬の世の習慣によりて今日はも其が祝莚打開かむとまづ大御前を忌まはり清まはりて禮代の幣帛と献る物は櫻と匂ふ御酒年緒長き御饌將眞心をうつせる鏡餅を始めて種々の味物を百取の机代に置足はし常磐なる榊葉に白髪つく木綿取垂で御祭仕へ奉らくを聞こし食し諾ひ給ひて今ゆ後「某」が身は彌健かに壽命永く家門の榮えは春の日の宇羅々に靡く藤波の長く遠く彌益に守り給ひ幸へ給へと鵜自物頸根突拔きて畏み畏みも白す

家宅改築起工式祝詞

是の神床に齋ひ奉り座せ奉る掛卷も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の御前に金光

教「何」教會長「職名 姓名」畏み畏みも白さく言擧げ
奉らむは畏かれど吾大神の大御惠はし久方の
天と高く輝き渡り荒金の地と廣く滿ち足らひ
奴婆玉の夜となく茜刺す晝となく神幸へ守り
給ひて此れの「某」が成務むる家業を彌榮えに榮
えしめ給ふ隨子孫の末遠永く隱ろひ住むべき
家宅を改築かむ起工式執行はむとして今日の
活日の足日を吉日の吉辰と齋ひ定めて大御前

を忌清まはり御祭仕へ奉る禮自の幣帛は御酒
に御饌に餅飯の鏡を始めて海川山野の味物を
種々に撰整へ机代に置足はして擎げ奉らくを
平らけく安らけく聞こし食し給ひて今日より
始めて此踏平らす土の平らかに築き堅むる磐
根の動く事なく建て並ぶる棟門の高く嚴しく
手人等諸が法の隨過つ事なく違ふ事なく緩む
事なく怠る事なく勤み務めて打墨繩の速けく

竣工しめ給へと鹿自物膝折伏せ鵜自物頸根突
拔きて畏み畏みも白す

上棟式祭祝詞

此れの處を神床と祓ひ清めて神籬立繁し招奉
り座せ奉る掛卷も畏き天地金乃神教祖金光大
神の珍の廣前に齋主「職名姓名」畏み畏みも白さ
く言卷も畏かれど我大神の廣く厚き恩賴を蒙
りて是の「姓名」が家業の彌榮行く隨子孫の末遠

永く住むべき家宅を改め築かむと今年「年号の
月日」より工事を起して今日の吉日の美日に上
棟整ひぬれば其の祭式仕へ奉らむとして奉る
禮自の幣帛は御酒御饌を始めて海川山野の味
物を種々に取揃へ御前に置足はして捧げ奉ら
くを平らけく安らけく聞こし食し諾ひ給ひて
此れの家宅を造り立て成整ふる事等に過犯け
む罪事のあらんをば教祖の神の御教の隨神と

かせ神許し給ひて今ゆ後速けく竣工しめ給ひ
築立し礎堅く科戸風の害加具土の荒びなく堅
磐に常磐に千歳の宿と子孫の八十續きに嚴し
彌木榮の如立榮えしめ給へと鹿自物膝折伏せ
鵜自物頸根突拔きて畏み畏みも白す

開教奏上祝詞

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の
珍の廣前に「職名姓名」畏み畏みも白さく己はも
劣く拙き身にはあれど今日しも遠近の信徒諸
を彌集へに集へて教祖の神の遺し給ひ傳へ給
ひしこれの美し大道を說き諭し教へ導かむと
す故れ老たるも若きも各自神訓の大御旨を思
ひ違ふことなく覺り過つことなく甘らに聽收
めて彌益眞心篤く家業をは勵み勤み皇國の爲
に功しく道の爲に忠實しく子孫の八十連續に
至るまで嚴し彌木榮の如立榮えしめ給へと禮

自の机代物を捧げ奉りて畏み畏みも白す

實例の部

小倉教會所教祖十年祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教會特派講師 安部喜三郎 謹み敬ひ畏み畏みも白さく言卷も畏き吾教祖と仰ぎ奉り生神と稱へ奉る人力威乃命はや去し天保の十二年より信神の一念を凝らし給ひて嘉永の五年御年三十九歳の時神宣により大神の御心を直々に氏子に傳ふるの道を開くと言立給ひ吉備の國在る木綿崎山の麓大廣前の内只一間に端座坐しながら彌御心行を積ませ給ひて眞道を開き信徒諸を教へ導き說き諭し社會を救ひ人草を助け給ひつゝ八十二箇條の神訓を立て本教の基礎を固め置き給ひて明治の十六年十月の十日にしも木綿崎山の奥城の奥

深くぞ神隠れ給ひける故今年は早くも十年と成りぬれば今日の活日の足日に其式年祭仕へ奉り大御恵の百千々の一つをだに報い奉らむと請の隨己れ喜三郎參出來神事仕へ奉る禮自の物と由貴の御饌餅飯の鏡を始めて御酒は嚴瓮の嚴しり滿て海川山野の種々の味物を横山なす置足はして奉る宇豆の幣帛を安幣帛の足幣帛と平らけく安らけく聞こし食し給ひて今も往先も桂教師教へ導く事等は說き過つ事なく傳へ違ふ事なく廣く遠く彌益に布施さしめ給ひて皇朝廷を手長の御代の安御代と成幸へ國民諸を裳なく事なく饒び樂み立榮えしめ給へと畏み畏みも白す

金光四神貫行之君例祭祝詞

明治三十年十二月廿日

此れの所に神籬立て繁し招奉り座せ奉る金光四神貫行之君の珍の御前に金光教會本部庶務

課長　安部喜三郎

謹み敬ひ畏み畏みも白さく、言葉も忌々しかれど汝命ぜ此現世を今はと見果て、幽冥に座す教祖の神の御許に參昇り給ひしは六年の昔此月の今日なりけり阿波禮汝命は教祖の大神の御後を神繼ぜ給ひて飛彈人の打墨繩の只一筋に御志を堅め御心行を積ませ給ひ夜も安らに眠り給はで十年の間を一日の如大神に仕へ奉り信徒諸を說き諭し教へ導き給ひしかば誰人も仰ぎ崇まへ神の木の千代かけて思ひ賴めりしを如何なる神の御量にやかく神隱れ給ひしぞ返す返すも口惜しき事の極なりける然れば汝命の御教を蒙りし人等は其の御心を心として彌益眞心堅固く勤み務め殊に眞名子攝亂主は日に異に廣前に仕へ奉りて道の光は金光の白金黃金と照り輝き四方八方に布至りつゝある事よ阿奈尊きかも阿奈畏

きかもかく大道の開け御教の進みけるは專ら教祖神又汝命の廣く厚き恩賴に依れる事を眞澄の鏡佐夜加に仰ぎ奉りて今日の御祭仕へ奉ると是の御前に參列れる親族家族教師諸の爲に細鉢中取持ちて拜み仕へ奉らくを聞こし食し諸ひ給へと式の隨禮自の机代物を横山なす置足はし捧げ奉りて畏み畏みも白す

木盃下賜報告祭祝詞　明治卅年八月十日

掛卷も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教會特派講師安部喜三郎畏みも畏みも白さく過にし明治廿七年の初夏の頃清國は我國との條約を破り厚誼を失ひし物から天皇陛下は大御軍を彼國に遣し給ひしかば軍人諸は大日本丈夫の名に背かず大詔の隨に功しく立働き大き勳功を顯して凱旋の聲も轟に日の御旗外國までも輝したりきかくて其の時

しも國内に殘りたりし民草諸は老も若きも心の限り力の限り軍人を勵し、ゞ此れの教會長角南佐之吉はも信徒諸共に眞心の只一筋に大神に乞祈奉り又恩賴の金若干を軍人の犒にと献したりしに今回岡山縣知事高崎親章主より其を賞め給ふとして木盃をぞ賜りける故れ今日の生日の足日を吉日と撰び定めて信徒諸を集へ御祭仕へ奉り此事の由を聞え上げ奉らむ

と請の隨己れ喜三郎參出來て今しも其木盃を奉り神祝に祝豐祝に祝添へて禮自の物と御酒御饌種々の味物を御前に置足はして奉らくを甘らに安らに聞こし食し諸ひ給ひて今ゆ後角南の教師ゞ信徒諸共に大君の御爲皇國の御爲に眞心盡さしめ給へと男鹿なす膝折伏せ鵜自物頸根突拔きて畏み畏みも白す

大祭祝詞

明治三十二年五月二十二日

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教會天瀬支所長大講義　安部喜三郎

謹み敬ひ畏み畏みも白さく吾大神の大御惠輝り渡りつゝ、美し眞道の日に月に開け進み行く隨今日はも毎年の例の大祭の回り來ぬれば日に異に蒙れる恩頼の百千々の一つをだに報い奉らむとして奉る禮自の物と鏡なす餅飯を始め御酒は瓮上高知り瓮腹滿並べて甘菜辛菜鰭の廣物鰭の狹物奥津藻菜邊津藻菜に至るまで種々に取揃へ百取の机代に置高なし擎げ奉らくを樂人が奏づる琴の調豊に吹笛の音の懇に聞こし食し諾ひ給ひて皇大朝廷は千代に八千代にさざれいしの岩秀となりて苔のむすまで動くことなく變る事なく國内穩ひに民草安らに守り給ひ幸へ給ひて此れの教會所に仕

へ奉る教務は過つ事なく違ふ事なく美し天地の正道を彌廣に彌遠に布擴めしめ給ひ信徒諸が家にも身にも病しく煩はしき事なく子孫の八十續まで嚴し彌木榮の如立榮えしめ給へと白す

辭別けて白さく今年七月よりは海外の諸の國人も吾大御國に參來天皇の大御蔭に隱ろひ家居する事となりにければ今日よりは彌皇國の大稜威打輝き內外の人の悉に彌益大神の高き神德を仰がしむべく幸へ給へ守り給へと畏み畏みも白す

別派獨立祝祭祝詞

明治三十三年七月廿二日

掛卷も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教天瀨教會長安部喜三郎謹み敬ひ畏み畏みも白さく嗚呼吾教祖の神の御心行を積ませ給ひて神と人との通路を開き給ひ

立て給ひし吾美し眞道は次々に進み益に布至りぬるを以て去し明治十八年の六月に神道本局に屬き金光教會を創設け明治廿年十一月には進みて直轄教會となり年に月に教の筋は明らけく道の光は彌增に打輝きつゝ信徒の數は天の益人益に殖り行く隨別派獨立せむとして内務省に請願ぎ去年の七月に其願書を捧げたりしを畏きや今年六月の十六日に認可を蒙り全く獨立の教派となりて世界に眞道を布施す時期の來ぬるぞ最も尊く最も畏き事の限なりける故れ今日の吉日の美日に其の祝祭仕へ奉らむとして奉る御饗の御酒御饌を平らげく安らけく聞こし食し給ひて今ゆ後吾眞道の教を奴婆玉の夜となく茜刺す晝となく彌廣に彌遠に布擴めしめ給へと神壽に壽稱へ豐壽に壽添へて畏み畏みも白す

教祖廿五年紀念大祭祝詞

明治四十年十一月十三日

安部喜三郎

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に少教正謹み敬ひ畏み畏みも白さく吾教祖神と仰ぎ畏み奉り生神と稱へ尊み奉る人力威乃命はや去し天保の十二年より信神の一念を凝らし給ひ嘉永の五年神宣によりて廣き世に聞きも傳へぬ畏き大神の御名を稱へ神路山杉の下道彌遠く彌深く稜威の千別に別登り給ひ大神の神慮を心として立給ひし神訓の多在る中にも信心は本心の玉を研くものぞや信心する人は何事にも眞心になれよ心配する心で信心をせよ信心して壯健で家業を務めよ君の爲なり國の爲なりと說諭し教導き社會を救ひ人草を助けつゝ一向に大神に仕へ奉らせ給ひ三十餘年の長き年月を一日の如く只一間の内に端座坐して俗人の伺ひ奉る

べくもあらぬ心行を積ませ彌吾大御教の基礎せ堅め置き給ひて明治の十六年十月の十日木綿崎山に立昇る眞霧の奥に神隱れ給ひしより璞玉の年を重ねて彌大道の開け榮行く隨早くも今年は廿五年の記念の大祭の回り來ぬれば今日はも大御前を忌まはり清まはりて其式年祭仕へ奉らむと請の隨己れ喜三郎參詣來て神事仕へ奉る禮自の幣帛は由紀の御酒餅飯の鏡を始めて海川山野の味物を種々に取揃へ御前に置足はして擎げ奉らくを樂人ぞ奏づる琴の調べ豐に吹く笛の音の懇に遊の業をも仕へ奉り神慮を宇良賀し奉らくを平らけく安らけく聞こし食し諾ひ給ひて今ゆ後片島の教師ぞ日に異に教へ導く事等を過つ事なく違ふ事なく神直毘大直毘に見直し聞直し給ひて附從へる教師は更なり此の教會所に仕へ奉る人等ぞ入

紐の同心に力を合せ飛彈工打墨繩の只一筋に道の爲教會の爲眞心盡さしめ給ひて彌金光の御名の四方八方に輝き渡り彌廣に彌遠に道の眞を布擴めしめ給ひ信徒諸〻家にも身にも枉神の枉事あらしめず夜の守日の守に守り給ひ幸へ給へと鵜自物頸根突拔きて畏み畏みも白す

金光副管長誕生日祝祭祝詞

掛卷も恐き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の御前に金光教明石教會長安藤伊之吉畏み畏みも白さく今日の生日の足日は本教の大本と仰き奉り尊み奉る大教會所の廣前に端座して日に異に參集ひ來る信徒諸を教導き說諭し其の願と願ふ事等を大神に聞え上げ大き神德を蒙らしめむと身も棚知らに勤み給ふ副管長攝胤の君の生れましゝ日にぞある故れ大御前

を忌清はり御酒御饌種々の味物を机代に置足はし捧げ奉らくを聞こし食し諾ひ給ひて吾眞の道を彌益に押擴め布施さしめ給へと畏み畏みも白す

才崎教會所大祭祝詞

明治四拾年七月廿二日

安部喜三郎

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に少教正畏み畏みも白さく言擧奉らむは畏かれど吾大神の大御惠はし久方の天と高く荒金の土と廣く世の中に滿渡らせ給ひぬればそを畏み仰ぎ奉ると日に異に此れの御前に參詣で拜み奉る信徒諸を彌益に神幸へ守り給ひて教會長片岡の教師ゞ仕へ奉る廣前の彌廣く榮え行く隨此れの教會所を新らしく營み仕へ奉らむと職員諸ゞ年まねく計畫りて遂に去年の四月より事始めして今年六月の三十日に嚴しく上棟の整ひ次々に其事を

進ましめ給ふこそ忝くも嬉き事の極みなりけれ故今日はも毎年の例の隨大祭仕へ奉らむと由貴の御酒餅飯の鏡を始めて海川山野の種々の味物を忌机の上も多和々に置高なし奉り置きて吹鳴す笛の音に打合す皷の音の高々に遊の業をも仕へ奉り神慮を宇羅賀し奉らくを平らけく安らけく聞こし食し給ひて今ゆ後教會長が仕へ奉る教事は教祖の神訓に違ふことなく慾つことなく布擴めしめ教會所新築の業は飛彈工打墨繩の速けく竣工しめ給ひ信徒諸が手取り行く眞道の一筋に神幸へ守り給へと畏み畏みも白す

金光登勢一子大明媛廿五年祭祝詞

（金光登勢一子大明媛廿五年祭の祭典の君例祭）

明治四十一年十二月六日

次郎

金光登勢一子大明媛金光四神貫行之君の神靈の御前に金光教久留米教會長權少教正石橋松畏み畏みも白さく阿波禮吾教祖の神の嫡

妻と坐す大明媛はや汝姫は教祖神ぶ社會の爲皇國の爲に眞道を開き美し教を立給ふとして身をも心をも大神に捧げ仕へ奉らせ給ひしかば汝姫は一向に御子等を育て給ひつゝ夜となく晝となく道の事等何くれと助け給ひしに教祖神は明治の十六年の十月に神隱れ給ひしが汝姫も一年をおくれさせ給ひて明治の十七年十二月の廿四日にしも即て其御許に參昇り給ひしより吾眞の道は彌廣に開け行きつゝ早くも今年は廿五年の御祭に回り來ぬ故れ今日は

も貫行之君の毎年の例の禮事に併せて大明姫の式年祭仕へ奉らむと御酒御饌を始め海川山野の味物を机代に置足はし擎げ奉らくを平らけく安らけく相嘗に聞こし食し諾ひ給ひて今ゆ後不肖松次郎ぶ教の筋を過つ事なく信徒諸ぶ心に道の眞を明らめしめ覺らしめ大道の榮

は彌益〻に廣く厚く靈幸へ給へと恐み恐みも白す

澤田教師結婚式祝詞

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に大講義安部喜三郎謹み敬ひ頸衝拜みて白さく今日の活日に此れの澤田義三郎の長男長三郎が安井彌市の二女楚野子と妹背の契なさまくと請の隨己れ喜三郎齋主として其の儀式仕へ奉らむとす故奉る禮自の物と由貴の御酒餅飯の鏡を始めて種々の味物を御前に置足はし捧げ奉らくを平らけく安らけく聞こし食し諾ひ給ひて夫妻の契は咲花の移らふ事なく巖なす彌堅らかに將來成務むる教事は教祖の神訓其儘に過つ事なく違ふ事なく赤く清く直く正しき誠心以て高砂の松の相生に千代萬代も變ることなく生れ出でむ愛子の殖り榮

えて家門も廣く壽命も長くあらしめ給へと乞
祈奉らくを打上る八平手の音高々に聞こし食
せと畏み畏みも白す

國威宣揚祈願祭祝詞

掛卷も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の
珍の廣前に金光教天瀨教會長少教正 安部喜三
郎 謹み敬ひ畏み畏みも白さく掛卷も畏き
天皇は列國との交の重きを思はして專ら平和

を旨とし給ひしに彼の露西亞の國はしも己が
國を富すには人の生命の損害はるゝをも思は
す國の境界を擴むるには世界の親交の破るゝ
をも顧す近き邊の國々を侵畧り清國を脅して
は漸に滿州の全部を奪はむとし遂に旅順口大
連灣を占領ぎ又隙を窺ひては韓國をさへ言向
けむとして禮なき事のみ重りければ今年二月
の十日になも彼露西亞に對ひて宣戰の大詔を

煥發せ給ひければ我陸海軍人等はや大詔を背に負ひ大稜威を頂に捧げ旭の御旗さしかざし出立進む軍の門出には醜の軍艦を仁川の沖に打破り旅順口に擊沈めぬ阿奈雄々しきかも阿奈勇しきかも此く逸速くも大き功績の顯はれしは全ら我大御神の大神助と仰ぎ奉らるゝぞ最も最も畏かりける故れ是を以て今日の活日の足日に大御前を忌まはり清まはり御祭仕へ奉る禮自の物と御酒御饌種々の味物を机代に置足はし捧げ奉らくを平らけく安らけく聞こし食し諸ひ給ひて今ゆ後皇軍の進みて戰へば必ず勝ち攻むれば悉く陷れ我日本の國の光は彌、宇内にい照り輝き彼醜國も自ら悔恥らひ吾大君の大稜威を仰き恐み奉らしめ給ひて吾陸海軍人諸もろ凱旋の聲勇しく天地も響動まむ計りに祝ひ壽ぎ樂ましめ給へと恐み恐みも乞

願奉らくと白す

祝捷祭祝詞（旅順陥落）　明治三十八年一月五日

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教天瀬教會長少教正　安部喜三郎謹み敬ひ畏み畏みも白さく去年二月十日露西亞に對ひて宣戰の大詔を煥發せ給ひしより大和心の山櫻匂ふが上に天祐の加れる皇軍の向ふ處は科戸の風に天雲の晴る事の如く朝日の影に露霜の消ゆる事の如く遼陽の城を攻めては敵を追散し沙河堡に戰ひては敵を打撥ひ今回又彼の敵國が東洋の要害と思憑みて築固め攻むるに難く落すに難き根據地ぞと言擧せし旅順口をさへ逸早く開城ぬるは最も最も雄雄しく勇しき事の極になむ斯る戰況は世界に未だ曾て例なき事とて外國人も賞賛へ高く轟く勝鬨と鳴り渡りぬ是は固より

天皇の高き稜威と軍人等の大きなる勞きとに
よるものから大神等の廣く厚き恩頼を蒙らず
ば如何でかは如此在まし故れ是を以て今日の
生日の足日に信徒諸を大御前に集はしめ御酒
御饌に種々の味物を取添へ机代に置足はして
既往の御恩を謝び白し又將來の神幸を仰ぎ乞
祈奉らくを平らけく安らけく聞こし食し給ひ
て今ゆ後皇軍人諸ゞ彌益に建び進みて立働き
敵の夷は千萬群れるとも風に向へる浮雲と吹
き拂はせ醜の軍艦は百八十來とも海原の底の
伊久利と沈め沒てしめ皇國の大御光を天下に
打輝かし我
大君の大稜威を仰がしめ給へと萬歳呼ばふ聲
諸共に天の八平手打上げて畏み畏みも白す

日本海大海戰祝捷祭祝詞

明治卅八年六月七日

掛巻も恐き天地金乃神の大前教祖金光大神の

珍の廣前に金光教本部庶務課長少教正　安部喜三郎

謹み敬ひ畏み畏みも白さく我皇大御國の大御光は千早振神の御代よりい照り徹りて一度だにも外國の侮を受けし事なく彼の文永弘安の頃雲を起せる龍の如風をよばへる虎の如たけびにたけび荒びに荒びし元の國ぜ千萬の戰をこしてあだなひ奉りしにも毎に得勝たで在の悉筑紫の海の底の伊久利と沈み沒てぬるは今更に申さむも愚かなる事なりけり然るに彼の露西亞の國ぜ年まねく世界の人道を道とも思ひたらず禮なき事のみ重りぬれば其を膺給ひ懲し給ふと大詔の隨去年の二月より皇軍の彌建備に建備彌進、みに進、みて海に陸に連戰連勝高く轟く勝鬨は天下に廣く鳴り渡り國の光の彌益に照り輝きてありしに今回吾聯合艦隊は敵の第二第三艦隊三十八隻を對馬の沖に

邀撃ち或は之れを撃沈め或は之れを捕獲て彼敵國が頼に頼みたりし波爾的艦隊を全く打滅しゝは雄々しとも勇しとも譬へつべきものもなく稱へつべき言の葉もなく我日本の國の光は天の壁立つ極國の避立限り輝き渡らぬ處やあるべき是は固より我大元帥陛下の高き稜威と軍人等の大きなる勞とによるものから大神等の廣く厚き恩頼を蒙らずば如何でかは如斯在まし故此を以て今日の生日の足日に戰捷の祝祭仕へ奉らむと種々の味物を御前に置足はして既往の御恩を謝び白し又將來の神幸を乞祈奉らくを平らに安らに聞こし食し給ひて今より後も皇軍の隊にある人等が心は忠に雄々しく身は強く健に武び進み立働き打出す大砲の音の高々に尤けき功を立てしめ彼敵國をして速けく懼恐ませ我

大君の大稜威を仰がしめ給へと畏み畏みも稱へ辭竟へ奉らくと白す

平和克復祝祭祝詞

明治三十八年十一月三日

掛巻も畏き天地金乃神の大前教祖金光大神の珍の廣前に金光教天瀨教會長安部喜三郎謹み敬ひ畏み畏みも白さく去年の二月に露西亞の國との事起りし時はしも彼の國ぞ最も大きく兵隊の數も最夥多なれば其の戰爭の往先や如何ならむと思を焦し心を惱まし晝となく夜となく一向に祈願奉りつゝありしに我陸海軍人等はや燒鎌の利心振起し彌建備に建備彌進み進み連戰連勝陸には醜の夷を山の道緒毎に追伏せ川の瀨毎に打撥ひ海には敵艦を八十の島曲に打破り八重の潮路に打沈め今は彼の敵國ぞ戰はむ術もなき迄に成り果てしめしは最も最も雄々しく勇しき事の極になもありける

かく勝おはせたる程に亞米利加合衆國の勸め申すにより平和克復の詔勅を下し給ひて世界は平和の昔に克復りぬ阿奈尊きかも阿奈嬉しきかもこは全ら

大元帥陛下の大稜威と軍人等の勞苦とに依るものから大神等の廣く厚き恩賴を蒙らずては如何でかかくも大きなる戰の速けくは治るべき故れ今日はも信徒諸を集はしめ御酒御饌種々の味物を大前に置高なし捧げ奉り神祝に祝豐祝に祝御祭仕へ奉らくを平らけく安らけく聞こし食し諾ひ給ひて

天皇陛下の大稜威は彌天地にい照り輝き皇國の御光は彌天下にい往渡らしめ給ひて歸り來む軍人等が凱旋の聲も轟に天地も響動まむ許り祝ひ壽ぎ樂ましめ給ひ國民諸は信心して壯健で家業を勤めよ君の爲なり國の爲なりとの

神訓其儘に過つ事なく違ふ事なく彌益に勤み
勵ましむべく守り給ひ幸へ給へと畏み畏みも
白す

祝詞雜稿終

明治四十二年六月五日印刷
明治四十二年六月十日發行

編輯兼發行者　安部喜三郎　岡山縣淺口郡三和村大字大谷三百三十二番第二地

印刷者　安井宇吉　岡山縣岡山市大字船頭町三十七番地

印刷所　山陽活版所　岡山縣岡山市大字西中山下百五十四番地

255
250